

富岡鉄斎の医家肖像

岩間真知子

静岡県ふじのくに茶の都ミュージアム客員研究員

富岡鉄斎（1836～1924）は、明治大正時代に活躍した画家である。89才で没するまでに2万点にも及ぶ膨大な量の作品を残し、テーマは山水・花鳥・人物など、画風も文人画から大和絵、狩野派等々、多岐に及ぶ。日ごろから「万巻の書を読み、万里の路を行く」ことを標榜し、明治時代に北海道から九州まで探訪、富士山にも登頂した。また貴重な和漢書を多数収集し、大正11年（1922）には当時珍しい鉄筋コンクリート3階建ての書庫を作っている。鉄斎は蔵書に遠慮なく作者の伝記や肖像を自ら書き入れたり、大きな印を捺したり、美しい布で付箋を貼ったり、帙や箱を作ったりと、たっぶりの愛情を注ぐ。没後、蔵書は目録も作られ、2度売り立てられた。目録を見ると『証類本草』『本草彙纂』『古写本本草経』『本朝医談』『黄帝蝦蟇経』『北齐医方』『医仙図賛』『宋本素問』『神農本草経』『医心方』等々医薬書も含まれる。その中には、後に武田科学振興財団杏雨書屋や公文書館などに収蔵されたものもある。

鉄斎は古人を友とし、また師と仰ぎ、その肖像を集めた。61歳の「偉人画像帖」という作品の序に「常日頃、私は欽慕する人々の肖像を集めて12月晦日までに数百も得ることが出来た。そのうち一つとして手前勝手な憶測によるものはない。その中から数十人に略伝を付け、この画帖とした」と記す。言葉通り、鉄斎は人物の肖像模写を多数残している。勉強のための模写には、張仲景・小野蘭山・李東壁の像が見える。

また鉄斎研究所刊行の『鉄斎研究』などに掲載された作品を見ると、西洋医祖秘父像と題されたヒポクラテス像が2点、孫思邈をテーマとしたものが4点（漢土名賢像〔孫思邈〕、孫真人山居図、思邈仙窠図、孫思邈医仙象）、そのほか医家とは言えないが、薬神少彦名命図などもある。

西洋医祖秘父像とはヒポクラテスの肖像で、蘭方医・小石家所蔵の石川大浪筆の像を鉄斎が模写したものであるという。鉄斎は付属の大浪の書簡も写しており、それによると、肖像は寛政12年（1800）蘭方医・小石玄俊が杉田伯元（杉田玄白の養子）に依頼して、大浪に描いてもらったものである。日本では、漢方医が神農像を掲げ祀るように、蘭学者はヒポクラテス像を祀った。そのため今日多数のヒポクラテス像があるが、それは大槻玄沢がヒポクラテスを医聖と仰ぎ、ゴットフリート『史的年代記』に掲載されるヒポクラテス像を大浪に写させたことに始まる。そして日本にあるヒポクラテス像は、みな『史的年代記』掲載の像を基とするという。50代の鉄斎はこの像を描くことで、西洋の陰影法と、ヒポクラテスについて学んだのであろう。

孫思邈について、鉄斎は「唐の孫思邈、医書千金方を著す……その書を得て大いに感ずるところ有り。故に此の図を画き、敬慕の意を顕す」と、最晩年89才の作品「孫思邈医仙象」の箱書きに記している。6曲屏風「漢土名賢画像」の中の孫思邈像では、『撰養枕中方』から養生の道を説く部分を引用し、孫思邈の略伝を記す。前述の「孫思邈医仙象」には『仙仏奇踪』長生説を引用し、大怒大欲大酔を避け寿を保つよう説く。このように鉄斎は48歳の作品「漢土名賢画像」以来、複数回、孫思邈像を描いている。

鉄斎は書籍の中に古人の姿を求め、意に適う言葉や思想に出遭うと、その古人を敬慕して、人物像を描く。人物を描く際には、必ず典拠を求め、研究の手段として人物像を模写した。研究のため模写した人物像は多数あるが、そのまま作品とすることはなかったようだ。自らの意に適い、顕彰したい人物のみ作品に取り上げ、略伝や思想を賛に記し伝えようとしている。そうした人物の中に、ヒポクラテスや孫思邈もいたのである。